〔論文〕

幸田文「食欲」の表現

――〈厭〉の感情に注目して――

水　藤　新　子

〈目　次〉

1　はじめに
2　分析の対象
　2.1　「食欲」における感情表現
　2.2　「食欲」における感覚表現
3　「食欲」に見られる「マイナス表現」の諸相
　3.1　オノマトペ
　3.2　比喩表現
　　3.2.1　指標比喩
　　3.2.2　結合比喩
　　3.2.3　文脈比喩
　　3.2.4　共感覚表現
4　まとめ

1　はじめに

ある作品に接し，読者は何らかの感興を覚える．この場合，主題そのものに左右されるのは勿論だが，表現に負う面も少なくない．「何を」語られるかと同様に「どのように」表わされているかによっても，読者の印象は大きく変わってくる．表現は一見「結果」で，それ自体もう完成し読み手が関わる余地はない．そう思われるのは作家の側から見た場合であって，読者にとっては「入口」である．読者は一語一句に接することで作品の全体像を理解し把握し，その目指すところ＝主題へと辿り着けるのである．

論者が研究課題としている幸田文（1904～1990）の文体は，しばしば「感覚的」と評される[(1)]．何を根拠に読者はそう感じるのか，作品中の表現・言語使用を採り上げ，語学的な検証を進めている．ただ一口に「感覚の表現」といっても，個々の表現を生み出すものが一様ではないことは，検索や抽出をすれば明らかである．心地よい音があれば不快極まりない響きがあり，肌ざわりにも好ましいものと避けたいものとが存在する．こうした感覚は半ば先天的に決まっているようなものだが，その時々の心理状態によって，同じものが快にも不快にも変わり得る．例えばある人物を話題に上らせるにしても，話し手がその相手に好感情を抱いているのと嫌悪感を覚えているのとでは，表現は相当に異なるだろう．

本稿では基調となる感情が比較的わかりやすく一定している作品を採り上げ，その感情が感覚を通してどのように描かれるかを見ていきたい．

2　分析の対象

「食欲」は1956年11月１日発行の「新潮」に掲載された．婚家が没落し，夫婦の心も離れ，離婚を決意しかけた頃に夫が結核で倒れ，捨て置けず看病と金策に追われる主人公・沙生（すなお）のやるせない心情を描いた作品である．

幸田文は父・露伴の闘病記を書くことで文筆家としての道へ踏み出したため，本人は長らく「想い出屋」「私は玄人じゃない」と卑下し続けたという[2]．「食欲」も自身の体験を元に書かれているが，一人称の語りではなく「沙生」という主人公を設定し，婚家の細かな設定も事実とは異なっている点で，創作意識の明確な作品と捉えられる．

テキストは岩波書店刊『幸田文全集』第六巻を用いた．原則として引用文の表記は現代仮名遣いとし，常用漢字については新字体に改めた．ルビ及び傍点は幸田自身による．

2.1　「食欲」における感情表現

この作品に現れた感情表現は，のべ110例／異なり74例であった[3]．

喜：9／6　怒：2／2　哀：10／7　怖：6／3　恥：3／3
好：12／7　厭：57／36　昂：3／3　安：3／3　驚：5／4

内訳は上記のようになっており，〈厭〉に関する表現の群を抜いた多さが目を引く．つまりこの作品は沙生の〈厭〉という感情を基調として描かれており，その結果出現する感覚表現も，〈厭〉まではいかずとも何らかのマイナス感情に裏打ちされたものが主と仮定できるのではないか．

但し感情というものは，いつも直接的に出現するとは限らない．怒りや憎しみといったマイナス感情を，また喜びや誇りといったプラス感情であっても，あからさまに示すのは憚られる場合がある．一般的に，悲しみは「胸が張り裂けそう」，嫌悪感は「むかつく」，緊張や不安は「ドキドキ」等と表されるが，これらはすべて「感情」を「感覚」へ置き換えた表現である．本稿ではこの点に注目し，「食欲」という作品において基調となる感情＝〈厭〉を，間接的に示す手段として用いられる感覚表現を対象として分析を試みた．

2.2　「食欲」における感覚表現

一般に「感覚表現」という用語は，感覚の言語化と，感覚的把握との両義で用いられている．感覚の言語化は「頭が痛い」のように，いわゆる五感

――実際の身体感覚を言語化した表現をさす．感覚的把握は認識の対象や心理状態を感覚的に捉えた表現で，前者なら「締め付けられるように痛い」，後者であれば「心が痛む」のような例が考えられる．

このように，感覚的把握の主たるものは比喩表現と考えられるが，オノマトペ（擬音語・擬態語）を用いた表現も多数含まれる．同じ痛みでも，「ちくちく」と「ずきずき」，「きりきり」と「じんじん」では，その「感じ」は全く別のものとなってくる．

さらに共感覚表現と呼ばれる一群があり，「甘い／渋い声」のようにある感覚を表すのに別のある感覚を表す語を借用する表現を指す．「甘い／渋い声」の場合，味覚を表す「甘い／渋い」が聴覚の領域に転移して用いられたと考えるが，感覚的転移の方向性には法則がある．即ち，「味覚→聴覚」の方向性は決まっており，逆の転移はほぼあり得ない．

調査にあたっては上記のすべての観点から用例を収集したが，本稿では直接的な感覚の言語化は除外し，感覚的把握――比喩表現とオノマトペの用例を概観する．共感覚表現は「共感覚メタファ／比喩」とも呼ばれるため，比喩表現の下位分類として扱うこととする．

3　「食欲」に見られる「マイナス表現」の諸相

中村明（1995）に基づき，この作品に現れた感覚表現を調査したところ出現数はのべ158例／異なり152例であった[(4)]．これらのうち，マイナスの感情（怒・哀・怖・恥・厭）に関連した「負」の印象を与える表現（以下，「マイナス表現」とする）は61例／57例見受けられるが，これは全体の39％／38％に当たる．

3.1　オノマトペ

本論考ではいわゆる擬音（声）語・擬態語を広くオノマトペと一括し，品詞の違いは問わない．オノマトペを用いた表現を調査したところ，出現数は

60例／57例，うち「マイナス表現」は19例／18例で，全体の32％／32％に当たる．

1　（夫に）病まれればさすがにそれを見ては**ぎくり**とし、かえって**すうっ**と急に聖女みたいな奉仕の気になって、［355-9～10］

2　夫は入込みの三等にまず**ぎょっ**としたし、代り代りの若いインターンに少なからず悪感情を持ったし、部長先生の診察が週に二回なのに失望したし、［356-5～6］

「ぎくり」「ぎょっ」はともに驚きの感情を表すオノマトペだが，嬉しかったり楽しかったりする場面で用いるものではない．1では不仲の夫の重い病に，2では病の重篤さに反して，そして事前に病院へは周到な挨拶をしておいたにも拘わらず三等病室という予想よりも低い扱いに，マイナスの感情を誘発されたものであろう．

3　ただ結核とわかった以上、子供の日々への考慮と処置が残されていることを思うと、**むらむら**とものが云いたくなった。［355-7～8］

「むらむら」は直接「ものが云いたくなる」にかかっているが、本来は「むらむらと怒りが込み上げ／湧き上がり、ものが云いたくなる」のような表現があったと考えられる。

4　（痰壷を）あけてやろうとしたら、室つきの看護婦に**きんきん**云われた。［358-3］

「きんきん」は子供の高声にも用いるが，ここでは「看護婦」の注意がいかにきつく耳に当たったか，そして胸に刺さったかを示している．「強い」，「きつい」といった形容詞でなく多義的なオノマトペを用いることで，看病するものの辛さ，情けなさを複合的に物語る表現となっている．

5　夫はなじまない眼色だったし、彼女［派出婦］は催眠術師めかしく**じいっ**と病人を読んで片頬笑みをした。［359-3～4］

6　同室者は夫の食事へ目を瞠りだした。云いたい口に蓋をして眼だけで**じろじろ**やっているのだ。看視つきのたべものごしらえである。［385-9～10］

凝視する「じいっ」にせよ，眺め回す「じろじろ」にせよ，遠慮のない視線を受ける側は〈快〉とは感じない．**5**の派出婦はベテランらしく患者の容態を一目で見抜き，**6**で同室の患者は食材を吟味して持ち込む妻の手料理に驚きと呆れを込めた視線を向ける．「看視つき」は病状から言って当然のことだろうが，経験に裏打ちされた素早い観察を「催眠術師めかしく」とどこか胡散臭いものと捉えたり，あるいは愛想笑いでしかないものを余命を察して「片頬笑みをした」と見てとるのは，看病する者の引け目と過敏過ぎる神経を物語って痛ましい．

7　黙って、くたびれたと心のなかへ書いていたし、子供にもたべさせたい、あたしもたべたい、でも子供とあたしは、おいしいもの、いいものをこんなふうなたべかたはしたくないのです、と腹のなかへ**ぎりぎり**と書きつけていた。[387-1～3]

結末近くの一文である．終わりの見えない看病，経済面の苦労，食欲に姿を変えて第二の姿を見せている夫の病，それらすべてが厭だという思いは誰にも言えない．口に出せない愚痴，言っても詮無いあれこれは「心のなかへ書」き留めるしかない．渾身と呼ぶにふさわしい看病をすればするほど募っていく感は，手にした鉛筆が折れんばかりの力を込めるような「ぎりぎり」の語に集約されている．

擦れ合う／引き絞るさまを表す「きりきり」と濁音化した「ぎりぎり」を比較した場合，後者の方がより摩擦が強く切羽詰まった印象を与える．**4**でも述べたが，直接的な形容詞を並べて〈厭〉という感情を表すのではなく，複数の語感を有するために多義的な解釈を許すオノマトペを用いた間接的な表現に，沙生の絶望感が溢れている．誰もが日常的に見聞きし使いもするオノマトペで主人公の感情を雄弁に伝え，結果的に読み手の共感を大いにかちえることへと繋げている．

3.2　比喩表現

中村明（1977）に基づき，この作品に現れた比喩表現を調査したところ，

出現数は96例／93例であった[(5)]．うち「マイナス表現」は40例／37例で，42％／40％に相当する．

３．２．１　指標比喩

８　病院は沙生の生活とは懸け離れた、あるえらさのようなものでできているらしく、それは沙生をいじけさせこじらせた。［348-5～6］

比喩指標「のような」は「似た，類する」意を添える．さらに，「えらさ」の前に連体詞「ある」を，「のような」の後に形式名詞「もの」を付け加えることで表現はより曖昧さを増す．「えらさ」そのものではないが，それに近しいものを感じて沙生は萎縮する．病院という場所を頼りにする一方で威圧感を覚えるのは彼女に限ったことではなかろう．説明し難い複雑な心情を，平易な語の配列で巧みに言い表している．

９　夫だけが誰もついていない寝台に、沈んだようにしていた。［349-1～2］

夜通し「えらい咳」をし通し，「さっき注射してもらって寝た」夫が生気なく横たわっている．寝息を立てれば呼吸に合わせて胸のあたりは上下しそうなものだが，薬で抑えた呼気は弱く，掛け布団に隠れた肉体は薄くやつれ，むしろ低く「沈む」ばかりに映ったのではないか．

10　いま沙生は離婚などしてもしなくても、離婚の杭に繋がれて病気と金との棒でぶたれているようなものだった。［361-9～10］

離婚するつもりの夫でも，病気と知った以上捨てては行けないのが沙生という主人公の性格である．手術を終えたら，病後を乗り切ったなら，きっとそのときはと思いつつ看病と金策に追われる日々を，「棒でぶたれているようなもの」――屈辱的で痛みを伴う辛い日々だと言い切る．「身を切るような」「胸が張り裂けるような」など，心理的な労苦を肉体的な苦痛に置き換えた慣用表現は少なくないが，既存のそれらを援用せず新たな比喩表現を創出したことで，より実感を伴う場面となっている．

11　妻でもいっしょに行かれるのは（手術の）準備室の戸口までだった。

仏壇の扉のように折畳みに締まる戸だった。[371-9～10]

いよいよ手術の日を迎えた．双方の親の伝手を最大限に使って，外科部長に執刀を頼んだのである．全幅の信頼をもって送り出しているはずなのに，観音開きの扉に仏壇のそれを連想するのは何と不吉なものの見方だろう．沙生の意識の奥深いところにわだかまっている不安の強さばかりでなく，沙生自身気付いていない，あるいは気付かない振りをしている「もう終わらせたい」という思いをも物語っているのではなかろうか．

３．２．２　結合比喩

12　なんという優しくない門だろう。ぐうっと延びている道だろう、冷然とめいめいに構えた病棟だろう。[348-4～5]

12’　なんという厳しい門だろう。

病院の威容を表現するにあたり，「優しい」を打ち消している．代案の12’では辞書的に考えて対義語「厳しい」に置き換えたのだが，「優しい」は情のこまやかさをいうだけでなく姿形の上品さ，美しさをも示す．死病と恐れられた結核を扱う病院の門に，優美な意匠が凝らされていたとは考え難い．12’ではおそらく，沙生の感じた印象からかけ離れてしまうのだろう．

13　けさからたった七八時間だのに窶れがまたぐっと深くなっている。瀬戸際まで追いつめてきている病気の勢いのすさまじさが現われているのだった。[349-3～5]

14　そこいらじゅうが臭いようでたまらない。溜息が出ても、あとはそっと吸った。うつるこわさではない。病気の破壊によって生ずる汚穢のきびしさに打たれているのだった。[364-12～14]

15　（病気による）破壊のきたならしさが沙生の身のまわりを攻めていた。[364-15]

日に日に蝕まれていく夫の肉体はきたならしさを撒き散らし，「痰の臭い」は病室に留まらず沙生の前髪にまでこもって，「櫛を入れるとにおった」．病気は夫の命を「追いつめてきている」のみならず，健康なはずの沙生をも

「攻めていた」．生き物のように，人間のように，意志を持っているかのように，凄まじい勢いで進行する病気の恐ろしさが，感覚に訴えて描かれる．

16　決して愚痴には云うまいときめているけれど、事がいちど子供の上へ絡まって考えられると、云いたい口を塞ぐのは容易でない我慢だった。［355-12～13］

16’決して愚痴には云うまいときめているけれど、事がいちど子供の上に及んで考えられると、云いたい口を塞ぐのは容易でない我慢だった。

家業が傾き長屋暮らしをする中で医療費をいかに算段すべきか苦慮しつつ，まだ幼い子供のことも気にかかる．日々の世話をどうするか，寂しくひもじい思いをさせはしないか．16’のように影響が及ぶ，あるいは密接に関わるとせず，「絡まる」という巻きつき引き離しにくいさまの触覚動詞を用いて，問題の大きさ，悩みの深さをこちらも体感的に描いている．

17　頬の紅潮などほんのしろうとのたぶらかされだった。［376-5］

17’頬の紅潮はほんのしろうとをたぶらかすに十分だった。

「たぶらかされ」の形で名詞化するのは珍しい．「方」をつけて複合名詞とするか，17’のように動詞「たぶらかす」を用いるだろう．歌舞伎の演目「研辰の討たれ」のような，やや古風な印象を与える語法である．

18　（沙生は）**わあ**と泣きたいのである。夫ならいくら病気でも、そんな**ぴかぴか**光っちゃってひとりぼっちになっている妻を、なぜかわいそうだと思ってくれないんだろう。泣かないかわりに沙生は親指を噛んで痛がらせていた。［381-10］

18’泣かないかわりに沙生は親指を痛いほど噛んでいた。

18”泣かないかわりに沙生は親指を血の出るほど噛んでいた。

「あの女房貰ったことだけはえらかった」と「みんなから褒めものにされ」ても嬉しくない．その陰には周囲の，親の思いやりがあり，幼子のけなげな我慢があるのに，他人はともかく夫その人に理解してもらえない沙生は，胸の痛みを堪えるために肉体的な痛みを自ら引き起こし，それは鮮やかな活喩として提示される．

18’で用いた「痛いほど」あるいは「痛くなるほど」なら「痛い」のは親指の持ち主＝沙生だが，18の「痛がらせる」で「痛い」のは親指そのものとなる．18”のように「血の出るほど」としてしまうと痛覚の主体が消失してしまい緊迫感が落ちる．17とは質が異なるものの，やはり常識的な位置から視点を反転したかのような表現となっている．

19　夫の兄の代になってからは商売不振で財産は崩れる一方なのに、むかしの生活の格はもとのままで受継がれているかたちなのである。［354-13～14］

19’夫の兄の代になってからは商売不振で財産は取り崩す一方なのに、

20　ものは惜しくはないが、わびしく投げた心で売った。［386-9］

20’ものは惜しくはないが、わびしい心で投げ売った。

19、20は慣用的な19’、20’を元に表現を改めたものと思われる。

19’「取り崩す」はそうする主体を示すが19「崩れる」にはじわじわと自壊するかのような為す術のなさがある．売り抜きたいがために安値をつける20’「投げ売り」に対し，20で投げられているのは品でなく「心」の側とされていて，「わびし」く荒んだそれを感じさせる．

慣用的な言い回しに目新しさはない．その語順を動かしたり，語を差し替えたりすることで，手垢のついた表現が新たに生まれ変わり，死にかけた比喩性が息を吹き返す一例といえよう．

３．２．３　文脈比喩

21　すでにたびたび離婚を云いだしていて、いまはもうどうしてもとやりきれなくなった矢先にこんな病まれかたをし、病まれればさすがにそれを見てはぎくりとし、かえってすうっと急に聖女みたいな奉仕の気になって、［355-8～10］

22　もう何度、折角の聖女の奉仕を吹っ飛ばして見苦しく唇を尖らせたか。［356-4～5］

23　（夫に苛立ち）沙生はしょっちゅう聖女をとりおとしかける。［358-15］

24　「沙生、もう帰るの？」／ええ、とは云えない聖女が出てくる。「もう少しいましょうか。」[359-6～7]

前半部,「聖女」という語が集中して出現する．献身的で私心のない，さしづめナイチンゲールやマザーテレサのような姿を指すのだろう．**21**，**22**では「聖女みたいな／の（ような）奉仕」と比喩指標を伴っていたものが，**23**，**24**では捨象され，象徴的な名詞として用いられる．看取りをする中で知った自身の一面を自嘲的に，反語的に言い表したものである．**24**「出てくる」は「地金が～」などの慣用的な用法もあり，誰もが持つ二面性の表現として見覚えのある動詞だが，**23**「とりおとしかける」は内面にあるものと言うよりは実際に手にでき，取り外し自在の仮面か何か――しかも落とせば割れる何かのようで，より皮肉な印象を与える．

３．２．４　共感覚表現

いわゆる共感覚表現は７例あった．うち「マイナス表現」は２例で，29%にあたる．

25　そんなことを考えているあいだ、沙生に映っているものはきのうのあの部屋へ一歩はいった瞬間に**がちり**と来た光景だった。

[369-4～5]【視覚→触覚】

「半分ベッドから起きて，枠へつかまった細い腕，逆立った髪，ばかに大きな眼，子供のような一しょう懸命さ」を剥き出しにした「むざんな夫」の姿を見て，沙生は自問自答する．「なぜあんなけしきが好きなのか，なぜ無力な姿が気に入るのか」――思い出すのは求婚する若き日の彼の姿だった．「いっしょに食事をして映画を観て，家まで送って来たある晩，門のところで別れぎわにややだしぬけに，「来てもらえるかしら？」と云った」彼の「きれいな眼」，「一しょう懸命な眼」に「うなずけた」気持ちが，目の前のこの姿に「つながっていた」．自分は夫の弱い面，頼りたさを出して憚らないところに惹かれたのだ，だから今のこの姿に「生々（いきいき）させ」られるのだ――そう自覚した瞬間を，硬いものが空間に収まる「がちり」で示した場面である．

26　夫の$\boxed{\text{ことば}}$は、**のたのた**ときたない泥の縄みたようだった。

［382-4～5］【聴覚→視覚／触覚】

「一人部屋をやめて気長い療養をしてもらいたいと申し」出た沙生に対し，夫は「見る見る不機嫌になった」.「上から下へ行くのはいいけど、下から上へ戻るのはたまらない」と不平を述べ，「いっそうちへ帰ったらどうなの？」と言い出す．経済的にも精神的にも体力的にも追い詰められているのに思いやる素振りも見せない．沙生に限ったことではなく，老いた双方の親，周囲で骨折ってくれたすべての人に対してそうなのだ．身勝手で甘ったれた言い分を，水分を含みまつわり付いてくる泥の不快さが持つ「のたのた」に喩え，受け入れたくない，聞きたくないと思っている．いずれもオノマトペと共起させることで読み手の記憶や想像力を刺激し，沙生が感じたきつさ，きたなさをより生々しいものとして伝えることになる．

4　まとめ

重い病に苦しむ家族を看取るのはつらい．愛し合い信頼し合う間柄であればまだしも，家業が傾くにつれ心も離れていた夫である．離婚の話が出ていた矢先とはいえ，目の前で弱っていく相手を見捨てられず，妻である沙生は懸命な看病に打ち込み，自分で自分を追い詰めていく．

この作品に表れる感情表現は〈苦〉〈哀〉に留まらない．前記の通り圧倒的な数の〈厭〉が表出する．看取りには経済の問題が大きくのしかかるが，この夫は妻の心情を察しない，あるいは察していてもねぎらうことをしない．病人であることに胡坐をかき，我儘を押し付けてくるばかりで，入院費用，手術費，心づけ，一切合財がいかにして捻出されたか，どれほど頭を下げて回った賜物か訊ねない．義侠心とでも呼ぶべき意地でひたすら看取る沙生はしかし労苦を口にすることなく，それだけに胸の裡には〈厭〉な思いが澱のように溜っていき，すべてがその色合いで目に映るのであろう．

結末近く，回復期の夫が見せる旺盛な食欲を，沙生は喜びたくても喜べな

い．食べさせるには金がかかる．病院にかかる費用とは別に，新たな金の心配が生じてくる．自分はともかく幼い子供に我慢をさせ，求められるままにうまいものをかき集める心は荒む一方なのだ．題名を「病苦」や「病む夫」でなく「食欲」としたのも頷ける．

感情表現と感覚表現との相関は，一読者としての経験から直観で「ある」ものと見做して調査を始めたが，今回対象とした「食欲」に関しては予想以上に高いことが確かめられた．感情も感覚も豊富かつ平易な語彙を組み合わせてこまやかに描かれ，比喩表現はいずれも慣用の域を超えている．沙生の胸の裡で日に日に嵩を増していく〈厭〉の思いが，我が物我が事のように伝わってくる．作品全編を漂うやりきれなさは明らかに実感を伴うものとして，読者の心身を揺さぶるのである．

〔注〕

(1)　高橋義孝（1957）「『流れる』にも、これまでの幸田さんの行き方、すなわち外界の刺激に反射的に応ずるという行き方はまだ尾を曳いている。感覚と精神という言葉を使っていいのなら、これまでの幸田さんの行き方は感覚的な行き方だった。」，中村明（1979）「すでに作品『流れる』を読んだ読者なら、この作家の感覚描写がどんなにピンピンしているかよく判っているはずだ。それに続く第二の長編小説『おとうと』は痛切できまじめな作品だが、それでもその至情はやはり感覚的な表現によって生き生きと伝わってくる。」など（傍線引用者）

(2)　岩波版全集「月報８」　青木玉による談話「おぼえていること（一）」参照

(3)　12～20頁「使用の手びき」参照

(4)　４～19頁「解説」参照

(5)　中村明（1977）17～145頁「第１部　比喩論」参照

〔参考文献〕

尼ヶ崎彬（1988／1995）『日本のレトリック』筑摩書房／ちくま学芸文庫

磯貝英夫（1970）「近代文体と対峙する古典的話体文―幸田文―」（『文学論と文体論』）明治書院

市川孝（1963）「幸田文の文体」（『講座現代語５』）明治書院
金井景子・小林裕子・佐藤健一・藤本寿彦編（1998）『幸田文の世界』翰林書房
高橋義孝（1957）「解説」（『流れる』）新潮文庫
中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』（国立国語研究所報告57）秀英出版
中村明（1977／1995）『比喩表現辞典』角川書店
中村明編（1979／1993）『感情表現辞典』六興出版／東京堂出版
中村明（1979／1993）『名文』筑摩書房
中村明（1991）『日本語レトリックの体系－文体のなかにある表現技法のひろがり』岩波書店
中村明編（1995）『感覚表現辞典』東京堂出版
中村明（2011）『文体論の展開 ── 文藝への言語的アプローチ』明治書院
中村明他編（2011）『日本語 文章・文体・表現事典』朝倉書店
山口仲美監修（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社